体調に関するオノマトペは自然習得が可能なのか
—外国人住民への調査を中心に—

神村　初美

1. はじめに

オノマトペは日常生活で円滑なコミュニケーションを図るために頻繁に使用される。特に医療福祉の専門領域では、オノマトペによる情報伝達の有効性が明らかにされている（篠原・宇野2013、村山2018、神村2020）。しかし、言語学においてオノマトペは、「重要な言語要素であるにもかかわらず日本語だけでなく他の言語においても、もっとも遅れている研究分野の一つ（田守・ローレンス1997）」と指摘されるように、日本語教育ではあまり教えられていない（三上2007、獅々見2016等）。

一方、日本に住んでいる外国人の「滞日年数と言語行動可能項目数の相関は、当該の言語行動を行う機会の多寡による影響が大きい（森2010）」とした場合、毎日、日本語を使って生活している外国人住民の場合は、日常の言語接触からオノマトペを自然に習得する可能性もあると考えられる。しかし、外国人住民を対象としたオノマトペの自然習得に関する研究はほとんどみられない。

2. 問題の所在—外国人住民とオノマトペ—

入管法によって、「日本人の配偶者等ビザ」や「定住者ビザ」などで在住し日本人と結婚している人、「技術・人文知識・国際業務ビザ」、「留学ビザ」、「永住者ビザ」などで在住している外国人は、中長期在留者と呼ばれる。本稿ではこれらの中長期在留者を便宜上、外国人住民と呼ぶこととする。

外国人住民が日本語で日常生活を送る中で、駆使できたならば生活の質の向上に繋がるオノマトペの一つとして「体調に関するオノマトペ」がある。「体調に関するオノマトペ」とは、話し手が自身の体の調子や状態、および痛みの質などを聞き手に瞬時にわかりやすく伝えられる、反対に聞き手が話し手の体の調子や状態などを瞬時に適切にくみ取ることができるオノマトペを指す。例えば、「胸がどきどきする」の「どきどき」で、心臓の動悸といった症状や緊張しているといった心情を、また「頭がくらくらする」の「くらくら」で熱などで意識がはっきりせずめまいがするといった症状や不快といった心情をそれぞれのオノマトペだけで、話し手は聞き手に伝えられ、聞き手は話し手の訴えを理解できる。

外国人住民の実際の日本語使用については文化庁の調査が詳しい。そこで、文化庁の「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査（2001）」[1]（以下、文化庁調

[1] 今後の日本語教育施策の参考とするために地域に在住する外国人の日本語に対する意識等についてアンケート調査したもの。2001年3月2日～3月16日に実施され、対象は全国12地域の日本語教室に通っている在住外国人で16歳以上の男女。

査（2001））からこの「体調に関するオノマトペ」について見てみると、日本語学習期間との関連があることが分かる。この文化庁調査（2001）は、外国人住民581名を対象に、日本語が十分にできなくて困ったり、嫌な思いをしたりした場面とそのときの課題について探ったものである。困ったり嫌な思いをしたりした場面[2]の上位6項目の1番目に「病院」があげられ、理由は「医者に病状を話す」ことができないからと示された。しかし、学習期間が2年以上の人の場合は、おおむねこの「医者に病状を話す」ことが「できる」と回答したとされた[3]。つまり、2年以上の日本語学習期間を経た人の場合は、「医者に病状を話す」ことが「できる」ようになると言える。ここから、「体調に関するオノマトペ」も駆使できている可能性があると考えられた。しかし、文化庁調査（2001）で、「学習期間が2年以上の人」が「医者に病状を話す」際に「できる」と回答したその言語活動の具体的な内容については言及されていない。よって、学習期間が2年以上の外国人住民が「体調に関するオノマトペ」を駆使できているのかどうかについては不明である。そこで本研究では、学習期間が2年以上の外国人住民の「体調に関するオノマトペ」の自然習得についてパイロット的に探ることとした。

3. 先行研究

3.1. 「体調に関するオノマトペ」の機能

ファイザー（株）（2016）は、医師と患者を対象に大規模調査[4]を行い、「体調に関するオノマトペ」のその機能について明らかにしている。具体的には、医師は「体調に関するオノマトペ」を患者の状態や痛みの性質を把握する道具として上手に活用していると示した。調査対象の医師の約9割が問診時に「痛みを上手に伝える・聞き出すための工夫」としてオノマトペを使用しているとした。医師がオノマトペを使う理由は、「患者から痛みの情報を聞き出しやすくなるから」（93%）、「患者の痛みの表現から痛みの種類が推測できるから」（91%）とされた。また、問診で医師に痛みを上手に伝えられている患者とは「オノマトペを使用している患者」（61%）で、「使用していない患者」（54%）を上回ったとした。さらに、患者側も問診時にオノマトペをよく使うとし、その理由は「自身の痛みを説明しやすいため」（94%）、「痛みを感覚的・直感的に表現できるため」（93%）と示された。これらの調査結果から「体調に関するオノマトペ」は、医師と患者が容易に分かり合える「共通言語」として非常に重要な役割を担っていると結んだ。

上述のファイザー（株）（2016）の調査は日本人を対象としたものである。しかし、日本語でコミュニケーションを図る際「体調に関するオノマトペ」は、痛みや不快感を表す・理解するための「共通言語」として広く機能しているということを明らかにした。ここから、日本で暮らす外国人住民においても「体調に関するオノマトペ」を

---

2 「病院」「近所付き合い」「職場」「役所の窓口」「就職時」「学校教育の場」の順

3 1年未満が56.2%、2年未満が78.1%、2年以上が88.8%であった。

4 全国の患者5,150名と医師169名を対象とした大規模調査なインターネット調査

「共通言語」として駆使できたならば、彼らの痛みや不快感を分かりやすく伝えたり、他者の痛みや不快感を適切に理解したりすることに役立ち、安心感や日常の暮らしやすさという生活の質の向上に繋がると言える。

3.2. 日本語学習者が習得すべきオノマトペ

日本語学習者が習得すべきオノマトペについて三上（2007）は、初級レベルで習得が必要な基本オノマトペとして70語を提示している。まず、2段階にわたる丁寧な調査からオノマトペを抽出し、次に、真に基本的かつ必要であるのかを問う4つの選定基準で精査し、「日本語教育のための基本オノマトペ」の70語を定めた。[5]これら70語内で「体調に関するオノマトペ」は「がんがん、ごろごろ」の2語である。

獅々見（2016）[6]は三上(2007)に対し、紙媒体の資料ではなく会話コーパスからオノマトペを採用すべきで、基本語彙選定には言葉に対してのなじみの度合いを調査する親密度調査データを加味すべきと指摘した。そして、主成分分析をもって「日本語の会話におけるオノマトペの基本語彙」の252語を定めた。これら252語内で「体調に関するオノマトペ」は、「どきどき、くらくら、どーん、ぐーん」の4語である。

三上（2007）は教科書などによるデータから、獅々見（2016）は実際の会話によるコーパスデータからそれぞれ十分な量のデータと緻密な分析と検証をもって「何かの事を行なうために第一段階でまず必要とされる語彙（林 1971）」である基本オノマトペ語彙を選定している。しかし、外国人住民が「日本語ができなくて困る場面」の1番に挙げた「病院」で「医者に病状を話す」に係り、かつ、ファイザー(株)（2016）の大規模調査で「共通言語」と示された「体調に関するオノマトペ」は、三上（2007）で2語、獅々見（2016）で4語のみであり、いずれも極めて少ない。ここに、オノマトペの先鋭的な先行研究では、外国人住民のニーズに応じたオノマトペがあまり見られないという、オノマトペ使用の現実と研究との乖離が見られる。

これは、三上（2007）による教科書などには、そもそもオノマトペ自体があまり含まれていない点、獅々見（2016）が扱ったコーパスデータは、「初対面・友人、雑談・討論・誘い」での会話であるため「体調に関し話す」ような話題が生まれにくい点、

---

[5] 第1段階は、国立国語研究所の「日本語教育のための基礎語彙調査」など日本語教育のための日本語基礎語彙資料全8文献からオノマトペを抽出し、その異なり語数249語を選出した。4項目の選定基準を設け、対象データにおける重なりから精査し87語に絞った。第2段階は、幅広く知られている初級・中級の日本語教科書33冊と新聞・雑誌5点から別途にオノマトペを抽出し、第1段階で得られた87語と照合した。オノマトペを教育指導の観点からも捉えこれら70語による教材化を行っている。

[6] 使用されたコーパスは『BTSによる多言語話し言葉コーパス―日本語会話1（日本語母語話者同士の会話），日本語会話2（日本語母語話者と学習者の会話）』と『BTSJによる日本語話し言葉コーパス―日本語会話1（初対面・友人、雑談・討論・誘い）』である。これらのコーパスからオノマトペの出現頻度データ、親密度(見聞き)データと親密度(使用)データの3つの変数を統合した主成分分析における主成分得点を用いて273語のオノマトペの基本度の順位を決定し、そこから出現頻度と親密度(使用)が低い21語を除外した。その結果に252語を定めている。

そして、どちらも出現頻度に注目している点が影響したと考えられた。例えばツィガルニツカ（2007）は、オノマトペ教育へのビリーフ調査から、日本語学習者は「日本人との理解やコミュニケーション」を重視するが、日本語教師は「オノマトペの使用頻度の高さ」を重視するとし、学習者と教師の間にあるオノマトペ教育への視点のズレを明らかにした。そしてここから、日本語教師が日本語学習者側に立ち、現実的なオノマトペ使用を考えながら指導していく必要があると指摘した。

3.3. 日本語学習者の「体調に関するオノマトペ」の自然習得に関する研究

神村（2016、2019）は、日本語学習者の「体調に関するオノマトペ」の自然習得に係る調査を外国人介護従事者と超級日本語学習者を対象に行い、検討した。まず神村（2016）で、EPA 介護福祉士候補者へのヒアリング調査から介護のオノマトペの自然習得についてその一端を明らかにしている。「ぱちぱち、ばたばた、ささっ」といった、介護の場面や動作によって使用されるタイプの「場面・動作依存のオノマトペ」は、①場面、②専門的知識、③オノマトペの「身体性」、④眼前状況、⑤非言語行動より類推、から自然習得し得る可能性があると示した。また、「じんじん、ちくちく、すーすー」といった行為の目的によって使用されるタイプの「使用使途依存のオノマトペ」は、あいまいな理解状態のままで介護業務に携わっている実態があるとし、自然習得の限界を指摘した。次に神村（2019）で、超級日本語学習者[7]が持つ高い類推ストラテジーでの自然習得に注目し、「痛みのオノマトペ」への筆記調査をもって探っている。ここから、痛みを表す「ごろごろ」「ずーん」は、彼らの高い類推力を駆使しても浅い理解や揺れが見られ、①既習語彙・多義語性[8]による影響、②未習事項、②母語で「痛みのオノマトペ」は僅少、から意味把握には限界があると指摘した。[9]

しかし神村（2016、2019）では、外国人住民の「体調に関するオノマトペ」の自然習得については明らかにしていない。また、毎日、日本語を使って生活している外国人住民の場合、超級日本語学習者のような高い類推ストラテジーを駆使しなくとも、日ごろの言語接触の多寡からオノマトペを自然習得する可能性があると考えられる。だが、外国人住民の「体調に関するオノマトペ」の自然習得については管見の限り明らかにされていない。

4. 本研究の目的

本研究の目的は、日本人男性と結婚した外国人の女性を対象とした調査から「体調に関するオノマトペ」の自然習得の実態について、意味解釈の概観からパイロット的に探ることである。なお意味解釈とは、持ちうる情報を駆使しながら言葉や文章の意味・内容を解きほぐすして理解することと定義し、オノマトペ語彙はひらがなで記す。

---

[7] モンゴル・インドネシア在住の各母語話者の日本語教師。モンゴル 11 名、インドネシア 21 名。

[8] 1 つの形態で複数の意味を持つ語彙のこと

[9] 神村（2020）で、さらに 50 名の外国人介護従事者へのヒアリング調査を加え、外国人介護従事者の「痛みのオノマトペ」の「不理解」を明らかにしている。

5. 調査対象者と研究方法

5.1 研究方法

調査は、「体調に関するオノマトペ」の意味解釈の概観から自然習得について探ると位置付けた。調査語、調査文は神村（2019）を援用した。神村（2019）で示された超級日本語学習者による高い類推ストラテジーと参照するためである。調査語の内訳は、神村（2019）の12語（「痛みのオノマトペ」の「ごろごろ」「ぱんぱん」「ちくっ」「ちくちく」「ずーん」「ひりひり」「がんがん」と「使用使途依存のオノマトペ」の「ざっ」「さっ」「さーっ」「ささっ」「ぽかぽか」）に9語を追加した合計21語である。

追加した9語中の6語は、ファイザー(株)（2016）で見られた「むかむか」「ずきずき」「きりきり」「ぴりぴり」「しくしく」「きーん」である。社会貢献性が高いと判断し加えた。残りの追加3語は、神村（2019）を概観し、多義オノマトペであるからこそ、それぞれの「ごろごろ」の意味で調査文を作成し、そこで改めて各「ごろごろ」を提示すべきと思われた「ごろごろ」3語である。なお、多義オノマトペとは一つの形態で複数の意味を持つオノマトペを指す。調査語は調査文内に下線で強調し、ともに表4で示す。

表4　オノマトペの調査語と調査文

1	新聞を<u>ざっ</u>と読む。
2	頭が<u>がんがん</u>する。
3	彼女が来る前に<u>さっ</u>と部屋を片付ける。
4	目が<u>ごろごろ</u>する。
5	朝ご飯を<u>ささっ</u>と食べて出かける。
6	歩きすぎて足が<u>ぱんぱん</u>だ。
7	指に針がささって<u>ちくっ</u>とした。
8	胃が<u>ずーん</u>と痛む。
9	やけどで指が<u>ひりひり</u>する。
10	窓を開けたら<u>さーっ</u>と風が入ってきた。
11	頭が<u>ちくちく</u>する。
12	この手袋は<u>ぽかぽか</u>して暖かい。
13	のどが<u>ごろごろ</u>する。
14	胃が<u>きりきり</u>する
15	朝から<u>むかむか</u>して吐き気がする。
16	カッターで切った指が<u>ずきずき</u>痛む。
17	舌が<u>ぴりぴり</u>する。
18	下腹が<u>しくしく</u>痛む。
19	家で<u>ごろごろ</u>する。
20	アイスを食べると歯に<u>きーん</u>としみる。
21	お腹が<u>ごろごろ</u>している。

調査方法は、調査文内のオノマトペの意味を母語で記述する筆記調査と半構造化インタビュー（以下、INT）である。筆記調査のINTは、筆記調査後に全員を対象に60分間行い文字化した。全員同時としたのは、オノマトペの意味解釈は母語であっても言語化しにくい面があるため、全員で日本語による自由闊達なやり取りを介させることでオノマトペを意識し、そこからできるだけ詳しく語ることを促せると考えたためである。

INT項目は以下であり、同時に筆記調査の回答への語りも促した。

a) よく使う（聞く）オノマトペはどれですか。

b) あまり使わない（聞いたことのない）オノマトペはどれですか。

c) 最初は意味が分からなかったが、だんだんわかるようになったオノマトペはどれですか。またその理由は何ですか。

筆記調査の分析は以下の順で行った。

1). 翻訳経験がある各母語話者3名 が母語ごとの被験者の筆記結果を各人翻訳
2). 1)を一覧表にし、照合
3). 2)を1)の3名と日本人日本語教師 1名合計4名で考察し疑問点を挙げ、被験者に確認し、その往還を記述
4). 母語で記した各被験者記述に対する3名分の各翻訳文を3)を参考に整理
5). 佐藤（2008）を参考に4)を定性的にコーディング

考察は、INTの文字化データを適宜合わせ複眼的に行った。

5.2 調査対象者

調査対象者の詳細を表3で示す。横軸は調査対象者、縦軸は項目である。

表3　調査対象者の概要

	fb01	fco02	ft03	fch04	fp05	fa06
職業	食品工場工員	食品工場工員	食品工場工員	食品工場工員	介護ヘルパー	スペイン語個人講師
年齢(歳)	44	61	51	54	55	70
出身国	ブラジル	コロンビア	タイ	中国	ペルー	アルゼンチン
在留期間(年)	30	31	30	19	30	40
3歳から12歳の居住地	ブラジル	コロンビア・ボゴダ	タイ・ヤントウン	中国・上海	ペルー	アルゼンチン・ブエノスアイレス
日本語学校等での学習	○	○	○	○	○	○
学習機関	日本語教室	日本語学校日本語教室	日本語教室	日本語教室	日本語学校日本語教室	日本語学校日本語教室
学習期間(年)	2年	1年・2年(3年)	2年	2年	半年・2年(2年半)	2年・2年(4年)
配偶者の年齢(歳)	32	62	49	61	60	死別
子供の人数(人)	4	2	2	2	2	2

本調査では外国人住民のうち、日本人男性と結婚した外国人の女性（以下、日本人男性の配偶者）を調査の対象とした。日本人男性の配偶者は、子育てや学校行事といった地域に根差した日常生活を通し、「日本のコミュニティや家族との文化の壁にぶつかる中で日本語で自らコミュニケーションを図る機会に迫られる環境にある（久野2002）」ため、「体調に関するオノマトペ」への遭遇から自然習得する可能性が高いと考えられたためである。調査対象者は6名で、平均年齢は56歳、平均在留期間は30年、

平均学習期間は2年半である。調査対象者は話者間の比較が可能となるように以下の条件で募った。

a) 日本人男性と結婚した外国人の女性で子供が 2 人以上いる人
b) 日本に 10 年以上住んでいる人
c) 3 歳から 12 歳の言語形成期に日本に住んだ経験がない人
d) 日本語学校等で長期間にわたり体系的な日本語教育を受けていない人
e) 地域の日本語教室等で 2 年以上学習した経験がある人
f) 日本で何らかの就労の経験がある人

上記の a)〜f)を条件にした理由は以下の通りである。まず、a) f)は、生活や社会との接点から「体調に関するオノマトペ」に遭遇する機会があると考えられたためである。b) d) e)は、文化庁調査（2001）のデータ基準に即した。c)は言語形成期による影響を考慮してである。

6. 結果と考察

本調査では特に「ごろごろ」において、多義オノマトペの影響を引きずった誤った意味解釈がみられた。また「ずーん」に日本語の音韻から類推した意味解釈と、それと相反する感性が窺われた。一方、その他は一般的な意味解釈に近いものであった。そのため、まず、「ごろごろ」と「ずーん」を中心に見ていく。次に、自然習得が窺われたオノマトペを取り上げ INT データと合わせ見ていく。そして最後に、調査対象者への観察や INT 時に寄せられた声から外国人住民へのオノマトペ教育について考える。筆記調査の結果を表 5 に示す。横軸は調査対象者、縦軸は調査語彙である。意味がわからないと示された場合は（わからない）と記した。

6. 1. 多義オノマトペ「ごろごろ」の意味解釈

「ごろごろ」では、本来の意味とは異なる誤った意味解釈が見られた。表 6 に多義「ごろごろ」だけを取り出して一覧で示し、それぞれ見ていく。

まず「4. 目がごろごろする」（以下、調査文 4）の「ごろごろ」は、異物の混入で不快だ、少し痛みがあるという目の不快な症状を訴えるオノマトペである。本調査では、この本来の意味解釈は全く見られなかった。得られた回答は「めまい」関連がほとんどで、神村（2019）での超級日本語学習者と同じ傾向が見られた。

ft03、fch04 は「めまい」、fc02 は「目が回る」、fb01 は「いろいろな所に行き渡っている」、fa06 は「メガネが緩んでいる」とコーディングされた。ft03、fch04、fc02、fb01 は INT でのやり取りで、異口同音に調査文 4 の「ごろごろ」は「目がぐるぐる回るから」と語っていた。ここから ft03、fch04、fc02、fb01 が「目がごろごろする」の「ごろごろ」を「めまい」関連で解釈した所以は、「ある物体が続いて小さな円を描くように回るさま」を表す既習オノマトペ「ぐるぐる」と繋げ、ここに引きずられた結果に至った誤った意味解釈であることが分かった。

表５　「体調に関するオノマトペ」の意味解釈

		fb01	fco02	ft03	fch04	fp05	fa06
1	ざっ	速い	速い	（わからない）	速い	速い	ちょっと見る
2	がんがん	痛い	痛い	頭がパンクした	痛い	痛い	刺さっている
3	さっ	急いで	すぐに	早くやる	ちょっとだけ	すぐに	早く
4	ごろごろ	いろいろな所に行き渡っている	目が回る	めまいがする	めまい	（わからない）	メガネが緩んでいる
5	ささっ	急いで	早く	早く	早い	すぐに	早く
6	ぱんぱん	膨らんだ	むくんでいる	足が太くなる	かたい	痛い	足が重くて引きずっている
7	ちくっ	棒？	痛い	痛い	刺された痛み	腫れた	針で縫っているような
8	ずーん	いつも	（わからない）	時々痛い	ずっと長く	（わからない）	深い、溜まる、痛み
9	ひりひり	蹴るみたいな	燃える	熱い　痛い	刺された痛み	やけど	やけど
10	さーっ	はやい	はやい	風が吹く	突然	空気が入る	ゆっくり
11	ちくちく	とがった	針で縫われたような	（わからない）	刺された痛み	軽く痛い	刺さっている痛み
12	ぽかぽか	暖かい	暖かい	おおきい	暖かい	暖かい	暖かい
13	ごろごろ	ころがる	ぐるぐる回る	ごろごろ音がする	音がする	（わからない）	転がっている
14	きりきり	（わからない）	刺されている	胃が熱い	筋肉に急にきて体が前になる	刺されている	（わからない）
15	むかむか	具合が悪い	気持ちが悪い	気持ちが悪い	気持ちが悪い	吐き気	けいれんがある
16	ずきずき	ずきずき	しみる	（わからない）	刺された痛み	刺されている	切断痛
17	ぴりぴり	点滅し続ける	（わからない）	熱い　痛い	しびれる	かゆみ	舌が辛い
18	しくしく	突く痛み	かゆい	痛い	陣痛のような痛み	（わからない）	刺された痛み
19	ごろごろ	終わらせている	何もしない	のんびりする	時間をつぶす	何もしない	休んでいる
20	きーん	クッションみたい	電気ショック	しみる	すぐ	電気がくる	深い激しい痛み
21	ごろごろ	巻き込まれた	おなかが空っぽ	おなかがすいてなく	おなかがすいて音がする	おなかがすいている	腸から音が出ている

表6　多義「ごろごろ」の意味解釈

		fb01	fco02	ft03	fch04	fp05	fa06
4	ごろごろ	いろいろな所に行き渡っている	目が回る	めまいがする	めまい	(わからない)	メガネが緩んでいる
13	ごろごろ	ころがる	ぐるぐる回る	ごろごろ音がする	音がする	(わからない)	転がっている
19	ごろごろ	終わらせている	何もしない	のんびりする	時間をつぶす	何もしない	休んでいる
21	ごろごろ	巻き込まれた	おなかが空っぽ	おなかがすいてなく	おなかがすいて音がする	おなかがすいている	腸から音が出ている

fa06 の「メガネが緩んでいる」は、fa06 の日常のメガネとの関係に照らし合わせ、「メガネが緩くて見えにくい」というなんとなく感じる視界の不快感を「ごろごろ」に結び付け回答していたことが分かった。fa06 はスペイン語教師で日ごろからメガネをかけている。筆記調査の記述の様子から、自身のことばを丁寧に表す傾向がみられていた。INT で回答に対し、「メガネがずれると見えにくくなるから」と調査対象者たちに訴えていた。これらを総合的に鑑みると、fa06 はメガネがずれた時の「視界の不快感」を「ごろごろ」に結び付け回答したと考えられた。

神村 (2019) においても本調査の fa06 と同じように「ごろごろ」を「視界の不快感」と結び付けている例が多く見られている。「眼精疲労」「目があまり見えない」「目がぼやける」「目を開けたくない」などである。ここから、本調査での a06 の「視界の不快感」を「ごろごろ」に結び付け回答した意味解釈は、「目がごろごろする」の「ごろごろ」における自然習得の実態を示す実証データの一つであることが分かった。

次に「13. のどがごろごろする」(以下、調査文 13) の「ごろごろ」は、のどに何かが詰まったような不快感とそれとともに生じる音を表すオノマトペである。fb01 と fa06 は「ころがる」、fc02 は「ぐるぐる回る」、ft03 と fch04 は「音がする」とコーディングされた。fb01、fa06、fc02 の「ころがる」「ぐるぐる回る」という意味解釈は、INT でのやり取りから、「小さい物体がころがるさま」を示す既習オノマトペ「ごろごろ」に引きずられた意味解釈であることが分かった。

一方、ft03 と fch04 が「ごろごろ」を「音がする」としたのは、INT で「猫、猫がのどをならしてる」といったやり取りから、のどから発せられる「何らかの音」として捉えていたことが分かった。しかし、のどに何かが詰まったような不快感については言及されなかったため、「不快感」は感じ取っていないことが推測された。ここから、日常で耳にした「猫がのどをごろごろならしている」の多義「ごろごろ」への言語接触から、調査文 13 の「ごろごろ」を「音がする」と捉えられたものの、大事な意味要素である「のどの不快感」までは捉えられていないと言えた。よって、自然習得でオノマトペに内包される「体の不快感」というニュアンスまでをくみ取ることは難しい

ということが窺われた。

そして「19. 家でごろごろする」（以下、調査文 19）の「ごろごろ」は、「特に何かをするでもなく無為に過ごす」「ゆっくりのんびりする」といった時間の過ごし方を表すオノマトペである。本調査においては、それぞれの主観を絡ませた説得力のある意味解釈が見られた。筆記調査の原文から例を示す。翻訳は調査手順 4)のものである。

fb01：Eu fiz tudo que tenho que fazer/ やらなきゃいけないことをして全部終わってる
fc02：No hagas nada, relájate y relájate/ 何もしない、のんびりリラックスしている
fch04：我正在消磨时间，因为我无事可做/ やることがないから時間をつぶしている

fb01 は「終わらせている」、fc02 は「何もしない」、fch04 は「時間をつぶす」とコーディングされた。まず fb01 は 4 人の子供の母親で、末の子は 3 歳でまだ手がかかり、工員でもある。ここから忙しい日常は想像に難くない。次に fc02 は、INT からラテン系のおおらかな気質が窺われ、回答に対し「何もしないのが一番いいね」と語った。また fch04 は、回答に対し「仕事がないとごろごろだね」と語った。一方、この調査文 19 の「ごろごろ」は日本語教育の早い段階から扱われるオノマトペであるため既知語彙といえる。これらを総合的に鑑みると、日常での調査文 19 の「ごろごろ」使用の多寡から習得が促進され、主観を絡めた余剰時間の過ごし方で「ごろごろ」を捉えられるようになった、その結果に至った意味解釈であると考えられた。ここから、説得力のある意味解釈は、自然習得による充実化の一側面によるものと考えられた。

そして「21. お腹がごろごろしている」（以下、調査文 21）の「ごろごろ」は、おなかの調子が悪い、少し下痢気味で不快であるという、お腹の症状をあらわすオノマトペである。しかし、本来の意味解釈は全く見られなかった。

fc02、 ft03、 fch04、fp05 は「お腹がすいている」、fch04 と fa06 は「音がする」とコーディングされた。fch04 と fa06 の「音がする」は、INT での「お腹がすくとなんか音がでる」とのやり取りから、お腹がとてもすいていることとその様子を表す「お腹がぐーと鳴った」でのオノマトペ「ぐー」との混同であると考えられた。

一方、調査文 21 の場合、日本語母語話者であっても「ごろごろ」の語感から音を想起し「鳴る」と関連づけるとも考えられた。しかし、日本語母語話者の場合、「お腹がごろごろしている」の「ごろごろ」を「お腹が鳴る音」と捉えても、「お腹の調子が悪い」といったお腹の不快感を感得し、それを大事な意味要素として主張すると考えられた。ここから、調査文 21 の「ごろごろ」に内包される「お腹の不快な症状」といったニュアンスを自然習得だけでくみ取るのは難しいということが窺われた。

6. 2. 「ずーん」の意味解釈

「8. 胃がずーんと痛む」（以下、調査文 8）の「ずーん」は、お腹の奥深いところに響くような重い痛み、胃が重いと感じる不快感を表すオノマトペである。fc02 と fp05 は「わからない」と記したものの、ft03 は「時々痛い」、fb01 は「いつも」、 fch04 は

「ずっと長く」、fa06は「深い、留まる、痛い」とコーディングされた。fa06はINTで「ずーん、の長いのとこからわかる。深いですよ。ずっとですね。」と語り、「ずーん」の音韻から「長さ、深さ、持続性」を類推し回答していたことが分かった。このfa06の語りに、ft03、 fch04、fb01はうなずいていたが、fc02とfp05は顔を見合わせながら「でも、よく分かんないよね・・」と語り合っていた。そのため、調査文8の「ずーん」は、「ずーん」の持つ日本語の音韻から類推しおおよその見当をつけながら、妥当な意味解釈をする場合もあるが、その感性は平均在留期間 30 年の外国人住民であっても絶対的なものではないと言えた。ここから、濁音や長音の音韻に限って言えば言語接触の多寡からのみで会得するのは難しい面があるということが窺われた。

一方、神村（2019 ）での超級日本語学習者による調査文8の「ずーん」の意味解釈は、「ちくんと」、「焼けるように痛い」など回答は様々で、意味解釈の大幅な揺れが見られていた。そのため「ずーん」に限って言えば、外国人住民による本調査結果と超級日本語学習者による神村（2019 ）の調査結果を単純に比較した場合、意味解釈においては外国人住民による自然習得の方が感度が高いことが窺われた。

6.3. 自然習得が窺われたオノマトペ

本調査においては、日本人男性の配偶者が日常生活で当該オノマトペの言語行動を行う機会の多寡から自然習得したと考えられるオノマトペが見られた。「6. 歩きすぎて足がぱんぱんだ。」（以下、調査文6）の「ぱんぱん」と、「7. 指に針がささってちくっとした。」（以下、調査文7）の「ちくっ」、「11. 頭がちくちくした。」（以下、調査文11）の「ちくちく」である。INTの文字化データを提示し見ていく。

まず、調査文6の「ぱんぱん」は歩きすぎなどで足が腫れて浮腫んだ様子や、それと共に感じる足の重さを表現するオノマトペである。本調査では全員からおおむね正しい意味解釈が見られた。また、これらの回答は就労現場などでの経験を通し自然習得していったことが分かった。

> 「ぱんぱん」は、わかる。工場でよく使うからねー。みんな足がね・・。立って仕事するから、よく言ってた。あーつかれた足が・・・って、こう触りながら・・で、足が太く、太くなってる・・それ、「ぱんぱん」ね。（fb01）

上記はfb01による調査文6の「ぱんぱん」への回答についてやり取りしたINTの文字化データである。fb01は食品工場で、日本人同僚が立ち仕事の合間に足の疲労感を訴える場面に幾度となく遭遇した。その際、日本人同僚が用いる「ぱんぱん」を、日本人同僚の疲れた表情や腫れた足、自分も同じように感じる足の重さから類推し「ぱんぱん」と繋げた。この経験から「ぱんぱん」の意味を理解できたとしている。INTでのfb01の語りに他の調査対象者も異口同音に共感を示した。ここから、「ぱんぱん」は自然習得によって会得されたオノマトペであると考えられた。

次に、調査文7の「ちくっ」、調査文11の「ちくちく」を見ていく。調査文7の「ち

くっ」、調査文 11 の「ちくちく」は、ともに「ちく」を語基とした異形[10]である。

オノマトペの語の素となる語基にその標識として「促音」「撥音」「り」等が接続することによって異形が生産されるのがオノマトペの体系であるが、この場合は「ちく」という語基に促音が接続した異形が「ちくっ」で、反復した異形が「ちくちく」である。調査文 7 の「ちくっ」は少し刺すさまやその痛みを表現し、調査文 11 の「ちくちく」は、小刻みに繰り返し刺すさまやその痛みを表現するオノマトペである。

調査文 7 の「ちくっ」、調査文 11 の「ちくちく」においては、ft03 が調査文 11 の「ちくちく」を「わからない」としたものの、調査対象者全員からおおむね正しい意味解釈が見られた。これらの回答は、家族などとの日常生活を通し自然習得していったことが fc02 の INT での回答への語りから窺われた。

> 「ちくちく」って、最初はねかゆいとおもってた・・あの一「ちくちく」する・・旦那が、冬の服、えーっとセーターを着る時に、嫌だこの服「ちくちく」する。この服合わないって‥言って、で　「ちくちく」するって言ってって、かゆいと思ってた。ね、でも孫と娘の会話でね、注射するよとのとき、娘が孫に言ってた‥「ちくちく」？？「ちっくん」？？わたし、「ちくちく」はかゆい、かゆいもあるけど、痛いもだね。で、孫が注射の時に「ちくっする？痛い？」って娘に聞いて・・で、あー刺すのね・・刺すときに痛いのね。それで分かった、「ちくちく」・・ねー。(fc02)

上記は fc02 による調査文 7 と調査文 11 への回答についてやり取りした INT の文字化データである。fc02 は自身の日本人配偶者がセーターを着るときの言語行動への観察から「ちくちく」を「かゆい」と解釈していた。だが数年後、予防接種での娘と孫の言語行動への観察から「ちくっ」「ちくちく」は、「かゆいと共に刺すときの痛み」であることが分かったと述べている。ここから、「ちくっ」「ちくちく」は自然習得によって会得されたオノマトペであると考えらえた。

7. 外国人住民へのオノマトペ教育の必要性

本調査において、まず ft03 は 21 語中 3 語（ざっ、ちくちく、ずきずき）を「わからない」と記し、筆記調査中大きな声で周囲に尋ねるなどし、オノマトペが「分からない」こととの対峙にストレスを感じているようであった。次に、fp05 は介護ヘルパーとして就労しているが、21 語中 4 語（[目が]ごろごろ、ずーん、[のどが]ごろごろ、しくしく）を「わからない」とし、INT では「目がごろごろ・・聞いたことあるかもしれないけど・・わかんないなぁ・・」と述べしきりに首を傾げていた。ここにオノマトペの不理解への fp05 の歯がゆさが見て取れた。また、fb01 は、「わたし、「ささっ」とはよく使うね・・・でも　なに？早くること？だよね？「さっ」ともある？あーでも「ざっ」はわからない・・。」　と述べ、おおよその見当でオノマトペの意味解

[10] 語基はある様子が見られる言葉の最小の音韻単位であり、異形は同じ語基を持つことによって共通の意味の素を持つもの（角岡 2007）。

釈をしていることが窺われた。さらにINTでは、調査対象者全員からオノマトペの曖昧な理解状態にもどかしさを感じていることが窺われ、「オノマトペで自分の気持ちを言いたいし相手のことも分かりたい」といった声が聞かれた。これらを総合的に鑑みた場合、平均30年の在留期間を有する日本人男性の配偶者にとっても、自然習得のみに頼った会得には限界があることが分かった。また、調査対象者のいずれも地域になじみ問題なく日本語で日常生活を送れているが、それでもなお、自身の症状や感情を伝え、反対に相手の症状や感情を理解するのに役立つオノマトペを身に着けたいという主張から、こういった外国人住民の実情に沿った現実的なオノマトペ教育支援の必要があると考えられた。

8. まとめと課題

本研究は、日本人男性の配偶者を対象とし、「体調に関するオノマトペ」の自然習得の実態についてパイロット的に探った。その結果、以下のことが分かった。

まず、多義「ごろごろ」は特に支援が要ることがわかった。具体的には、①「4.目がごろごろする」の「ごろごろ」を「めまい」「視界の不快感」と捉え、②「13.のどがごろごろする」の「ごろごろ」を「ころがる」と捉え、いずれも既習オノマトペで①は「ぐるぐる」、②は「ごろごろ」に引きずられた誤った解釈が見られたためである。また、③「13.のどがごろごろする」の「ごろごろ」と④「21.お腹がごろごろしている」の「ごろごろ」は、「音がする」と捉えたものの、そこに内在する大切な意味要素で③は「体の不快感」が、④は「お腹の不快な症状」が捉えられていなかったためである。ここから、オノマトペに内包される「体の不快感」というニュアンスを自然習得だけで会得するのは難しい側面があると考えられた。なお、⑤「19.家でごろごろする」の「ごろごろ」は、言語活動の多寡による自然習得の充実化が見られた。

次に「ずーん」は、その音韻から類推し妥当な意味解釈を図っている事例とその逆が見られた。さらに、就労や日常生活のなかで当該オノマトペの言語行動に伴う多寡から自然習得しているオノマトペの事例が明らかになった。

一方で、調査対象者全員に曖昧なオノマトペ習得状態にストレスやもどかしさを感じていることが見受けられ、自身の感情を表現する・反対に他者の感情を理解するための日本語教育支援として、オノマトペ教育の重要性が窺われた。

外国人住民が「体調に関するオノマトペ」を日常生活で駆使できたならば、身近な人や医師などに自身の体調についてわかりやすく伝えることが叶い、生活の質の向上に繋がる。また、外国人住民が聞き手側として話し手側である日本人住民などの体の状態や症状や心情を適切にくみ取れた場合、ここから地域における良好な関係の構築に繋がることが期待される。そのため、今後は、本調査を生かしながら調査対象者をさらに募って研究を進め、データの精緻化を図りたい。

参考文献

小野正弘（編）（2016）『日本語オノマトペ辞典』小学館

角岡賢一（2007）『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版

神村初美（2016）「介護のオノマトペは自然習得が可能なのか―EPA 候補者へのヒアリングから探る―」『日本語教育方法研究会誌』Vol.23 No.2,pp.46-47

神村初美（2019）「モンゴル語・インドネシア語母語話者は痛みのオノマトペをどのように捉えるのか―介護のオノマトペの調査から―」，『2019 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』,pp.178-184

神村初美（2020）「介護のオノマトペの分類から見るその機能と背景―介護職員と外国人介護従事者への調査から―」『日本語研究』第 40 号,pp.15-28

久野弓枝（2002）「地域日本語ボランティア教室の限界と可能」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』，86, ,pp.251-264

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法―原理・方法・実践』新曜社

獅々見真由香（2016）「日本語の会話におけるオノマトペの基本語彙選定―『BTS による多言語話し言葉コーパス』と『BTSJ による日本語話し言葉コーパス』を用いて―」『日本語教育』165 号,pp.73-88

篠原和子・宇野良子（編）（2013）『オノマトペ研究の射程』ひつじ書房

田丸育啓・ローレンス・スコウラップ（1997）『オノマトペ』くろしお出版

ツイガルニツカヤ・レナ（2007）「日本語オノマトペに対するビリーフー日本語教師と学習者の比較」『筑波応用言語学研究』第 14,pp.129-137

林四郎（1971）「語彙調査と基本語彙」国立国語研究所『国立国語研究所報告 39 電子計算機による国語研究 III』秀英出版，pp.1-35.

ファイザー株式会社（2016）『「痛み治療」に対する医師と患者の意識比較調査 2016』

三上京子(2007)『日本語オノマトペとその教育』 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士論文

村山明彦(2018)「エビデンスとナラティブの関係―認知症高齢者と高齢者ケア専門職の認知症スティグマに着目した検討―」『最新社会福祉学研究』第 13 号,pp.29-35

森篤嗣（2010）「職種別にみた滞日年数と言語能力の相関―日本語能力自己評価と言語行動可能項目数を指標として―」『社会言語科学』第 13 巻第 2 号, pp.97-106

法務省 HP「在留外国人統計」www.moj.go.jp › isa › press › nyuukokukanri04_00003 2021.01.21 閲覧

文化庁 HP「日本語に対する在住外国人の意識に関する実態調査 2001」https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/zaiju_gaikokujin.html　2021.01.21 閲覧

（かみむら　はつみ・ハノイ工業大学外国語学部日本語学科 学科長 准教授）